

制度としての科学的知識

古賀聖人 (Masato Koga)

慶應義塾大学

昨年の科学基礎論学会での発表および別のところ（古賀 2013）で、私はドレツキ (Dretske 1981, 1988)等による表象の因果—情報論的見方に経済学における合理的非合理性という考え方を導入することによって、経験的知識が、目的に応じた使用という点から道具的に合理的な仕方世界から情報を取得するプラグマティックな慣習として捉えられることを示した。

これを踏まえて、本発表では、進化経済学的の考え方を導入することによって、科学的知識を自生的に形成される制度として捉える見方を提示する。

進化経済学がその一部に含む制度派経済学の祖であるヴェブレン (Veblen 1919)は「人々の総体に共通のものとして定着した思考の習慣」として制度を特徴づけた。これに従えば、情報の伝達を通じて人々に共有されたプラグマティックな慣習としての知識は、制度として理解することができる。進化経済学的な見方によれば、慣習が制度として形成される過程や複数の制度を含む上位の制度が形成される過程において、慣習や制度に対する選択 (selection) が起こる。このような選択プロセスを通じて、制度および複雑に関係しあう目的の異なる多数の局所的な制度からなる全体的制度は、各々の目的を追求する多数の個人の相互作用によって、制度の中央管理者や設計者なしに形成される。このように形成される制度をハイエク (Hayek 1973)は「自生的秩序 (spontaneous order)」と呼んだ。さらにヴェブレンやホジソン (Hodgson 1988)によれば、これらの制度は、制度を構成する個人の慣習としてフィードバックされ、個人の思考や概念の枠組み、目的、選好に影響を与える。

このような制度として科学的知識ないし科学的知識の体系を見ることによって、本発表では、①個人の能力を超えた科学理論の全体論的な構成や改訂、②科学的知識のもつ客観性、③科学的知識の継続的な発展性に一定の説明を与えることができることが示される。

そして、このような見方をとることによって、科学理論のような科学的知識が、一方で、単一の実在と対応しているという意味での真理性をもつものではなく、他方で、純粹に人為的に構成されたものでもなく、道具的な合理性にしたがった情報の取得を通じて世界の側と人間が相互作用することによって形成されるものであるという見方が提示される。

さらに、人間とは独立に存在する単一の実在やその対応としての真理という概念は、到達されるはずのものではなくその必要もないものでありながら、それが措定され追求されることによって、制度としての科学的知識の絶えざる発展や改訂を促す推進力として機能する、一種のマクガフィンであるという見方が提示される予定である。

参考文献

Dretske, F. (1981) *Knowledge and the Flow of Information*, MIT Press.

Dretske, F. (1988) *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*, MIT/Bradford Press.

Hayek, F. (1973) *Law, Legislation and Liberty, Volume I: Rules and Order*, Univ. of Chicago Press.

Hodgson, G. (1988) *Economics and Institutions: A Manifesto for a Modern Institutional Economics*, Polity Press.

Veblen, T. (1919) *The place of Science in Modern Civilization and Other Essays*, Huebsch.

古賀聖人 (2013) 「経験的知識とは何か—合理的非合理性から見た科学的知識と知覚的知識」, 『入門科学哲学』, 慶應義塾大学出版会.